

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域～」

コーディネーター

指出 一正 氏

『ソトコト』編集長

『ソトコト』編集長。富山県「くらしたい国、富山」推進本部本部員、島根県「しまこトアカデミー」メイン講師、山形県小国町「白い森サステナブルデザインスクール」メイン講師、和歌山県田辺市「たなこトアカデミー」メイン講師、福島相双復興推進機構「ふくしま未来創造アカデミー」メイン講師、奥大和地域誘客促進事業実行委員会、奈良県、吉野町、天川村、曾爾村「MIND TRAIL 奥大和 心のなかの美術館」エリア横断キュレーター、群馬県庁31階「ソーシャルマルシェ&キッチン『GINGHAM (ギンガム)』」プロデューサーをはじめ、地域のプロジェクトに多く携わる。内閣官房、総務省、国土交通省、農林水産省、環境省などの国の委員も務める。経済産業省「2025年大阪・関西万博日本館」クリエイター。著書に『ぼくらは地方で幸せを見つける』（ポプラ新書）。

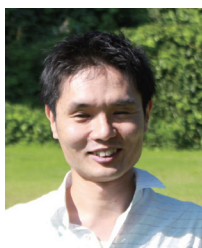


パネリスト



藤田 とし子 氏 まちとひと 感動のデザイン研究所 代表

大学卒業後、大手流通グループ、クチコミ系マーケティング会社等を経て、2001年、『かしわインフォメーションセンター』の事務局長、センター長（2019年～）。市民参加のまちづくりとクチコミを活かしたブランディング戦略で中心市街地活性化事業を展開。（株）全国商店街支援センター事業統括役時代（2010年～）には地域商業再生と新たな地域リーダーの育成に尽力した。この20数年、一貫して持続可能なまちづくりにこだわり、【掘り起こせ！地域の宝プロジェクト】として市民起点の『まち歩きMAPプロジェクト』を全国150エリアで展開。町衆の心に【まちへの誇りと愛着】を醸成し、次世代人材の育成に力を注いでいる。



金子 知也 氏 公益社団法人 中越防災安全推進機構にいがたイナカレッジ マネージャー

中越地震により過疎化が加速した新潟県中越地域の農村地域で都市部の若者を受け入れるプログラム「にいがたイナカレッジ」を2012年に立ち上げる。よそ者が地域課題を解決するのではなく、地域の人々と関わりながら日常を過ごすことで、地域に気づきを与える等前向きな雰囲気を生むきっかけ作りを重視したプログラムを設定。プログラムへの参加をきっかけに定住する人も多くみられるようになり、中越地域のみならず県内各地に活動の輪を広げている。



島田 優平 氏 (一社) ジソウラボ 代表理事

2008年より井波にもどり家業の林業に携わる。近年は南砺市の推進するエコビレッジ構想に呼应し、森林をキーワードに人と人との関係性や地域の方向性について考え、事業を通じて地域に貢献できるよう各種事業に参画している。2017年には（公社）となみ青年会議所理事長を歴任。また、日本遺産の認定をうけた地元井波地域において、井波日本遺産推進協議会ワーキンググループ座長として、日本遺産関連事業の推進。その事業をきっかけとしてジソウラボを有志で設立し、地域における人づくり事業を通して、地域活性に取り組んでいる。好きなことは人との出会いや旅行。



佐藤 みどり 氏 NPO法人立山 クラフト舎 代表理事／陶芸家

1983年生まれ。2002年 Keith Rathertの器に惹かれ陶芸をはじめ。愛知県瀬戸市を中心に陶芸を学び、2008年以降、個展・グループ展にて作品発表を行う。2014年富山県立山町に移住。3年間立山町地域おこし協力隊として活動。自身の作家活動の経験から、全国からもの作りの作家が集うクラフトフェア「立山Craft」を主催（2015年以降毎年開催）。富山県を代表するクラフトイベントとなる。2017年NPO法人立山クラフト舎を設立。代表理事を務める。立山町に築窯。2019年より作家活動を本格的に再開。富山県成長戦略会議 真の幸せ（ウェルビーイング）戦略PT委員、「くらしたい国、富山」推進本部本部員、とやま未来創造県民会議委員、富山県中山間地域創生総合戦略検討会委員。

「地域社会～」

指出／ここからは『ソトコト』編集長の指出が司会進行を務めさせていただきます。

まず、先ほどの宮口先生の基調講演、大変良かったですね。せっかくですので、皆さんにも感想を一言聞かせてもらえたらと思います。藤田さんどうですか。

藤田／お話の内容が本当に染み渡り、最後は涙が出そうになりました。特に「過疎地域は少しの支援で生き抜いてきた地域で、過疎地域は豊かな少数社会に置き換わることが国への最大の貢献」というフレーズが心に響きました。

指出／ありがとうございます。では金子さんいかがですか。

金子／過疎地域の歴史伝的なお話から、宮口先生の過疎地域への思いや願いを改めて聞かせていただき、私も新潟の中山間地域、過疎地域でいろんな活動をさせていただく身として、決意新たに頑張ろうという力強いエールをいただいたかなと思います。

指出／ありがとうございます。では島田さん。

島田／率直に過疎地域に生まれて良かったなと思いました。あと近代の富山県は売薬さんがエネルギーに目を向けて発展を目指した、というのは非常に印象的で参考にしたいと思いました。

指出／ありがとうございます。では最後に佐藤さんお願いします。

佐藤／過疎地域に移住してきた身として、過疎地域こそが豊かな少数社会という言葉がととも胸に響きました。豊かさの価値が都会と過疎地域とではガラッと変わったことを実感していましたので、過疎地域にしかない、過疎地域だからこそ感じられる豊かさにもっと目を向けていきたいなと感じました。

指出／ありがとうございます。それぞれ想いを秘めたところがたくさんあるかと思います。また交流会の時にいろいろな話ができたかなと思います。では早速始めていきましょう。ちなみに僕はルーツが富山です。黒部出身のおばあちゃん、そして親戚がみんな魚津にいますので、子供の頃から実家のある群馬県の高崎市から、あの頃は車で行くのと相当時間がかかったのですが、富山に来て美しい海の光景を常に感じていました。ですので、地域の豊かさを測るときに地域の幸せとは何だろうということを考えますが、それはその辺りが原

点になっていて、今の仕事に繋がっているのかなと考えています。

今日はウェルビーイング先進地域ということで、富山県はウェルビーイングをビジョンとして標榜されており、「幸せ」とも訳されますが、この「多様な人材がつくるこれからの地域社会」をつくり、維持していくときに、4名の皆様の取り組みに大きなヒントがあるのではないかなと考えています。

まず皆様の自己紹介と取り組み、それから過疎地域の魅力などについて聞かせていただいて、それから大きい議論として二つ考えようと思っています。実際にその多様な人材をどう呼び込めたいか、それから呼び込んだ後にどうすれば持続的に呼び込むことができるのか、そういったことで話を進めていけたらと思います。では、よろしく願いいたします。

まず、藤田さんからお願いします。

藤田／「まちと人 感動のデザイン研究所」の藤田と申します。

私は約20年間、まちづくり・地域活性化の分野で情報発信と新たな担い手育成を主軸に、地域の皆さんの伴走支援をさせていただいております。

最初に、私のまちづくりの原点を少しお話しします。

先ほど宮口先生のお話の中で、1970年に法律ができて、全国の過疎地域を何とかしていこうという動きが始まったとお聞きしました。

私は東京の日本橋、東京駅から歩いて5分の高島屋という百貨店のすぐ隣の商店街で生まれました。

皆さんは想像できないかもしれませんが、その時代に都会のど真ん中でも空洞化がどんどん進んでいました。

理由は日本の高度成長に伴う都心の再開発によるまちの再編で、その波に飲まれ、私の出身中学校は他の学校と合併し、形をなくしました。

また、私が住んでいた街区も再開発で移転を余儀なくされ、商店街や町会の皆さんとも散り散りバラバラになりました。帰るふるさとがなくなるということはどういうことか、皆さん、イメージできますでしょうか。地名もあり駅もあるのですが、その場所に立っても懐かしい風景はなく、会いたい人もいません。

大人になったとき、自分が根無し草になったようで、時折不安だったり悲しかったり、もやもやしたり、そんな気持ちになりました。

その後結婚し、千葉県柏市に移り住み、4人の子供を育てましたが、移住先のコミュニティになかなか溶け込めず、このまちを好きになれない違和感もあり、そこでまた、もやもやしていました。

そんな中、母親である私が子供たちのふるさととなる柏を好きになること、「このまちに帰ってきたい」、「何かあってもここに来たら落ち着く、力をもらえる」そう思えるまちづくりがとても大事なのではないかと感じるようになり、そのことが私のまちづくりの原点であったと思います。

その後、地域情報紙の記者をしていたご縁で、2001年に開設された「かしわインフォメーションセンター」の事務局長を務めることとなり、まちづくり事業にもかかわることになりました。

当初、柏の魅力をいろいろな方に尋ねたのですが、どなたも「特にないな〜」と答えるばかり。とはいえ、お気に入りのお店や人、大好きな居場所などがあるはず。その「お気に入り」がどんなことか取材し、市民自身の言葉で発信してみてもどうかと考えました。ただ、素人が思いを文章にまとめるのは難しいので情報誌の発行は断念し、代わりにみんなの「お気に入り」を訪ね歩く「まち歩きMAP」を作ろうと有志を募り、「掘り起こせ!地域の宝」地域の宝"まち歩きMAPプロジェクトが誕生しました。

プロジェクトを進めていくと、これまでは「魅力なんて何もないよ」と無関心をよそっていたメンバーの目の色が変わりました。楽しそうに取材に飛び回り、発見したことを嬉しそうに報告し、完成したMAPを嬉々として配布します。受け取った人からは「楽しそうなまちだね」「行ってみたいな」などの反響があるものですから、ますますやる気が出てくる。おかげで、柏市では毎年1作品、5年連続で発行することができました。

その後各地からお声掛けをいただき、これまで150地域でプロジェクトを展開させていただいています。

一方、地方を訪れるうちに、この町には若者がいないとか、担い手がないという声も聞こえてきました。そこで、今度はSNSで「地元を元気にしたい若者、集まれ」と呼びかけたらどうだろうと思いつき、若者の流出が進む埼玉県寄居町ではあえて『若者会議』を立ち上げ、担い手育成に取り組みました。

同会では都内で働く若者達が月に1度帰郷し、活気を失った地元を何とかしようというアイデアを出し合い、まち歩きMAPを作り、イベントを企画・開催する。最初は気のない素振りのメンバーも「寄居ってこんなに面白い」「寄居のいいところをもっと発信したい」と語るようになりました。

また、栃木県日光市の空洞化が進む中心市街地エリア（今市）では、商店街の跡取り達が7人集まり、『歩きたくなるまちづくり委員会』を結成。地名から101個の自慢できるエピソードを集めようと取材、編集に取り組み、住んでいるからこそ知っている、とっておきの話題を掲載した『マイイチ☆ピカイチMAP』を発行しました。その後、同委員会は世代交代を

繰り返しながら、今でも地域活性化の活動を続けているそうです。

私はこれまで、地域の方々がまちに対して誇りと愛着を感じ、自ら発信していく「しくみ」と「しかけ」そして人材の発掘育成ができたらと思い活動してきました。長くなりました以上です。



指出／ありがとうございます。では金子さん、お願いいたします。

金子／新潟から参りましたイナカレッジの金子と申します。よろしく申し上げます。

私は2012年から新潟県内の中山間地域で、外から人を受け入れるプログラム、イナカレッジという取り組みを立ち上げて活動しています。

私たちの原点となっているが2004年に中越地震が発生した際の経験で、当時新潟県の長岡市中心とした中越地域にたくさんのボランティアの人たちが訪れ、家の片付けや復興のイベントのお手伝いをする中で、手伝ってもらって役に立った、助かったというだけではなく、受け入れた地域の人たちとボランティアの人が一緒に汗を流す、時間を過ごす、あるいはご飯を食べるといった交流が積み重なることで、お互いに元気になっていくような状況がありました。

これは地域の人にとっては、「〇〇ちゃんが来てくれて嬉しい、〇〇さんに会いに行きたい」という関係性ができ、それによってお互いがお互いに元気になっていく経験となりました。

そうした経験があった後、地震によって人も減り高齢化も進む中で今後どのように地域の担い手を考えていこうかということで、2012年にこのイナカレッジを立ち上げました。

その際、地域の担い手とは何なのかと考えました。そして、そこに暮らしてもらうに越したことはありませんが、その暮らす、暮らさないという物理的な話以上に、先ほどのボランティアの話に通じるのですが、その地域に共感して地域の人と一

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

緒に汗を流して活動する、そういう人材を増やしていくことがこれからの地域づくりには大事なのではないかということを考えました。

それを私たちは“多様な担い手”という言い方をしており、これは今で言う関係人口にあたるのかなと思いますが、こうした人たちを増やしてこうと2012年から活動をスタートしています。

地域に関わるにはいくつかの段階があります。

最初がその地域に関わるきっかけづくり。それから、そこで興味持ってくれた人が参加しやすい日帰りのプログラムや週末に通いながら地域で活動するプログラム、1ヶ月滞在して活動するプログラム、長期バージョンの1年間のプログラム、というようないくつかの段階に分け、いろんなプログラムを現在行っています。

簡単に紹介しますと、日帰りのプログラムでは米農家さんのお手伝いをしていただく人を募集し、それに対してお米でお礼をするというものがあります。これは農作業だけではなく、例えば米袋のデザインとか、ネットに載せる記事の取材、執筆活動、そうしたことをお米でやっていただく取り組みになります。

あるいは、1ヶ月間地域に滞在しながら、地域を紹介する冊子や動画を作ったり、何か調査をやったりするような滞在型のプログラム、あるいはその1年バージョンで、今は新規就農を希望されている方を受け入れる長期プログラムも行っています。

私たちの特徴としては、例えば1ヶ月間のプログラムで言うと、1ヶ月かけてこういう冊子を作ってくださいとか、こういう調査をやってくださいというゴールをあらかじめ定めているのですが、そのようなアウトプットを作っていくプロセスをすごく大事にするとともに、地域の人たちと外から来る人たちがたくさん関わる場をとにかく作っています。そうすると、こういうアウトプットができましたということと併せて、1ヶ月終わった後、集落の人たちが集まる機会が増えたとか、会話が增えたとか、集落の会合に若い人たちが出てくれるようになったとか、地域の中で前向きな変化が起きることがあります。それを私たちは副次的な効果と呼んでいます。

私たちは、外から人を受け入れて何かをするということも大事ですが、その地域の中にいろんな前向きな変化を起こせるような取り組み、そうした部分を大事にしながら、外部の人材を受け入れる、ということをやらせていただいています。以上です。

指出／ありがとうございます。では次は島田さんと佐藤さんお願いします。島田さんと佐藤さんは富山の方です。では島田さんお願いします。

島田／南砺市井波から参りました。明日分科会で井波へ行かれる方もいらっしゃるかと思いますが、そこでジソウラボという団体を立ち上げて活動しております。その活動の一部をご紹介します。

「次の世代に選ばれる地域」「成長できる環境がある」「つくる人をつくる」をテーマに取り組みを行っています。そして人材輩出のまち南砺市井波と言われるようになればいいなと思いい活動しています。

井波には630年の歴史があります。そして井波彫刻という250年に及ぶ伝統工芸の技術もあります。

私の先祖は利賀村という過疎地から井波のまちにおりてきて事業を始めました。先祖もそういう意味では、山に関わり生きてきたということが記録に残っています。

井波は2018年に日本遺産というものの認定を受けまして、それからまちの動きが変わってきたように思います。

私もそのときから具体的にまちづくりに関わり始めたのですが、通常は日本遺産推進協議会という協議会を作って物事を進めていくことが多い中、私たち若い人たちにもその取り組みに関わって欲しいということで声をかけていただきました。年配者の方から初めてそんな声をかけられたのですが、一緒に関わってほしいということでワーキンググループを立ち上げ、そのお世話もさせていただきながら、30人ぐらいで議論したのがスタートになりました。

そこから派生してジソウラボという団体を作らせていただきました。

井波には歴史があるとお話ししましたが、歴史があるからこそ、これまではこうしてきたとか、伝統はこうですということや、“土徳”としてご先祖様やその土地に感謝するという精神があり、それ自体はいいことなのですが、推進力や今後どのように発展させていくかという力が弱い。そのため、これから私たちが特に力を入れていかないといけないのは、“ing”という実行力や実践力であり、そこを高めていく活動をしたいということで、“ジソウ”という、これは造語で主に自分で走るということがメインですが、いろいろ組み合わせでそう名付けた団体を立ち上げました。

若手といっても私たちは40代ですが、異業種のチームを作りました。これまで地域を見ていると、私たちもそうですが、同業者で組合を作ったり団体を作ったりということはたくさんあっても業種を超えて何かを実施できる団体がなかったので、異業種混合の団体を立ち上げ、特に木彫刻師さんも一緒にまちの取り組みの中に入れていただいたことが大きかったと思います。

メンバーの強みは多業種、多拠点、経営者、デジタルということで、一見一部の人でしかまちづくりできないのではないかと思われがちですが、やはりキーになるポイントを持った人たちでまずはやってみることが必要だと思っていて、今東京に住んでいてももう一生井波には帰ってきませんと言っているけど南砺市に貢献したい、ということで関わってくれているメンバーもいます。

宮口先生のお話にもありましたが、人を残すことが重要であり、さらにその人というのは事業がなければ育たないということを昔の方が言われていることから、事業を地域で起こしていくことにチャレンジしました。

井波彫刻は230年続いています、230年前に前川三四郎さんという木彫刻師の人が来たことによって井波彫刻が230年続き、いま井波彫刻師は200人ぐらいいるのですが、その200人の彫刻師が生まれました。ということは、今、前川三四郎のような人材を育てれば、100年後200年後にそうした人材が残っていくのではないかとということで、そうした人材を地域から輩出していけるような仕組みを作りたいと思い取り組んでいます。

そしてそのためにまず文化の源泉となる人材を地域で育てたいということで、まちでパン屋さんをやりたい人、パン屋さんができる人を募集したところ2週間で来ていただきました。また、交通の取り組みも一緒にやろうということで募集し、来ていただきました。

他にもクラフトビールをやりませんか、できませんか、一緒にやりましょうということで来ていただいています。

そして井波彫刻を支える糸鋸土さんも育てるということで来ていただきましたし、コーヒー屋さんをやりませんかと募集したところ、来ていただきました。

このように私たちの方から社会に向かってこういう地域でこういうことをしませんかと投げかけると、やはりこういう時代ですので、いろんな方が反応を示していただいて、今は5つの事例があります。

そして現在はジソウラボという団体のほかにも色んな団体も立ち上げて活動しています。

その成果なのか分かりませんが、7年間で南砺市井波地域に42件のお店が開業するという結果も出ています。以上です。



指出／島田さんありがとうございます。では佐藤さんお願いします。

佐藤／NPO法人立山クラフト舎の佐藤と申します。

私は20代の頃は陶芸の活動を軸として生活していました。そして2014年から富山県立山町の地域おこし協力隊として活動する中で、全国からものづくりの作家さんが集うクラフトフェア、「立山Craft」というイベントを企画しました。現在はNPO法人としてイベントを続けており、このイベントは富山だけではなく、北陸を代表するクラフトフェアに成長しています。

私が地域おこし協力隊として入った新瀬戸地区がどのような地区だったかといいますと、220世帯程の小さな集落で、3年前に保育園が閉校となり、翌年に小学校の休校が決まったという中で移住しました。

なぜここへ来ることになったかといいますと、元々その土地には越中瀬戸焼という焼き物があり、この土地で陶芸をする人を地域おこし協力隊として募集するというお声がけをいただき、それがきっかけでした。

しかし来た当初は色々な混乱があり、そもそも陶芸家の人が自分を呼んだわけではないということを知り、一旦陶芸を封印して陶芸以外の活動をすることにしました。

そして今まで陶芸しかしてこなかった自分には一体何ができるのか。今まではものづくりをしてきて、これから先もやりたいのはものづくりだけど、何ができるのか。そうした中で、今まで出店する側であった「クラフトフェア」と「地域活性」が初めて結びつきました。自分にできる地域おこしはこれしかない。

移住して約1年後、立山Craftの初回が開催されました。最初の来場者は2日間で8000人ほどとなりました。

北は山形、南は熊本から全国の作家さんが集い、フードや音楽もあり、あと大切な要素として、地域からの出展ブースを設けていただきました。

現在地域の理解を得てイベントを開催できているのは、この

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

時に地域の皆様が当事者として参加して下さったことが大きいなと感じています。

そして回を重ねるごとにいろんな要素を盛り込み、途中から入場料も取ることで自走する形になっています。9年の間にはコロナ禍もありましたが、その中でも火が消えてしまわないようないろんな規制がある中でも開催を続けてきました。

少し遡りますが、当初の目的だった陶芸の作家活動は、住居と工房を整えた中で製作を再開し、少しずつ軌道に乗っています。

地域おこし協力隊の期間はこの土地がたくさんの人の縁を結んでくださいました。

そしてこの3年間は決して遠回りではなく、この土地で活動していく上での近道だったんだと今なら思うことができます。

この土地について少しご紹介させていただきますと、元々この土地には一つの中学校、四つの小学校があるエリアでした。

一番多い時には全体で1000人ほどの子供たちがいたと聞いていますが、順々に休校となり、すべての学び舎が2019年までになくなりました。

しかし、越中瀬戸焼の方々が「かなくれ会」という団体を結成してイベントを始めたのを皮切りに、魅力的な古民家が貸しスペースになったり、立山Craftが生まれたり、国内外で活躍する和紙作家さんが工房を構えたり、移住者さんが集える牧場を作ったり、ハーブを使った癒しの施設が民間で生まれたり、ITの拠点が生まれたり、あとこれは主人の活動なのですが、林道を走るEバイクツアーが始まったり、世界に向けた日本酒の貯蔵所が生まれたり、魅力的な要素が一つ一つ生まれています。

そんな中で私が今感じているのは、地元の人新しい事業や人の流れについて人間さや新聞からしか情報が入ってきませんが、それは不信感からスタートすることに繋がってしまっています。一方で、新しく事業を始める方は思いを伝えたい、地元の理解を得たいというところがあります。移住してもうすぐ10年ですが、私はこの接着剤、つなぎ役になっていきたいなと感じています。私からの自己紹介は以上となります。

指出／4名の皆様ありがとうございます。皆さんお聞きになってお感じになられたかと思いますが、この4名はそれぞれ場所を作っていらっしゃる方です。場所というのは空間のこともありますし、状況のこともあります、プレイスメイキングといえます。

1人でも居心地がよかったり、みんなが集まって楽しかったり、そういう場所を作っている皆さんが、人を呼び込む活動

をずっと続けていらっしゃいます。過疎地域でいま大事なことのひとつとして、外からの人たちが集まって、そして中の人たちとやかに持続的に地域の盛り上がりを作っていくのかということがあります。その中でまずお話を聞きたいのは、皆さんそれぞれの地域で外からやってくる人たちをどう呼び込んできたのか、それは中の人への気づきかもしれないし外に対しての呼びかけかもしれませんが、そのあたりをぜひお聞かせください。順番に行きましょうかね。藤田さんお願いします。

藤田／私が伴走支援に入っているのは過疎地域だけではありませんが、外から人を呼び込もうという発想がない地域も数多くありました。

そんな中で大事にしているのは、地元に関心のない人たちも巻き込んで、足元に埋まっている地域の宝を掘り起こし、まちの魅力を再発見し、自ら発信していく気運を醸成すること。まち歩きMAPプロジェクトはその第一歩なのです。

市民有志で作るまち歩きMAPは正直、完成度は今ひとつ。デザイナー候補がいなければ手書きになります。それでも、とにかく地域のみんなが総力結集で、一つのものを作る。完成度よりプロセスが大事で、何かを発見したり感動を共有したりすることでまち想いのネットワークで広げていくということが大切だと考えています。

手作りのマップは見栄えは今ひとつですが、それでもメディアになります。いろんな場所で配布し、様々な人に見ただくことで、地域外の人も面白そうだと訪ねてきます。その人達の「この町すごく面白いね」とか「こんなところあったの」といった小さなつばやきがメンバーに届けば、大きな励みになりますよね。

今までは「何もない」と思っていた「通り過ぎるだけの町」でも、外から見ればそんなに喜んでいただけるのだという発見はその先の活動の原動力になりますし、自信をもって発信していくことで外の人を呼び込む力ともなります。

指出さんが仰っておられた交流人口の最初のタッチポイントづくりみたいなことを大事にしてきましたし、そこから広がっていけばいいなと思っています。

指出／藤田さん、大切な気づきをありがとうございます。

愛の反対は無関心とよく言われますから、無関心ということは自分の地域を愛していないのだなと僕は思ってしまうので、それを考えないといけないですかね。

では、先ほど佐藤さんの接着剤の話もすごくいい話だなと思ったのですが、まさに仕事として接着剤をめちゃめちゃやっているのではないかと。金子さんお願いします。

金子／地域に外から人を呼び込もうというときに、地域の人たちみんながそうだそうだ、やろうとなっているのが理想ではありますが、現実はそのことないですね。

例えば、集落単位で私達もやるのが結構多いのですが、正直な話、少ない時は1人2人、多いときでも5人ぐらいの、こういうことをやるのはやっぱり大事だね、と前向きに考えてくれる人たちとスタートするところから現実的にはやっています。

ただし、先ほど1ヶ月のプログラムというのも紹介させていただきましたが、スタート時点では前向きな数人の住民の方と一緒にスタートしても、1ヶ月間滞在して活動する中で、とにかくいろんな地域の人を巻き込んでいく、例えば、ひとり暮らしのおばあちゃんのところにお茶飲み行ったりとか、一緒に仲良くなってご飯食べたりとか、あるいは一緒に汗をかいて共同作業をしたりとか、とにかく滞在している期間にいわゆる地域のリーダーじゃない人たちもガンガン巻き込んで一緒に活動していくということをするべく心がけてやっています。そうするとプログラムが終わった後に振り返りした際、皆さん前向きな意見がすごく出やすくなったりとか、この間はこうだったけど本当はもう少しこうやってあげた方がよかったとか、次に向けた建設的な話が出てきたりします。

本当に数人からのスタートなのですが、終わってみたら何か勝手に巻き込まれていって、じゃあ次はもう少しみんなでがんばろうと、そういう機運をやりながら作っていくことを意識して実際に活動しています。

指出／ありがとうございます。知らず知らずのうちに巻き込まれているみたいなの。

金子／そうですね。巻き込み力がある人は大歓迎、そういう感じでやっています。

指出／勉強になります。ありがとうございます。では島田さんお願いします。

島田／外から人を呼び込んだ事例を5例挙げましたが、私たちがやったことは、やはり全国各地みんなが呼び込んでいる中、ほかとの違いを出さないといけないということで、まず自分たちがどんなまちに暮らしたいかというコンセプトを考えました。

そのコンセプトに基づき、こうした人たちがこの地域に来て欲しいということ、具体的な事例を挙げて、最初の事例だったらパン屋さんですね、この町でこういったパン屋さんやりましょうということを具体例を挙げて、私たちが求めている人材はこういう人ですと呼びかけています。あと、私たち

の特徴として、呼び込んだ後もずっとここにいてくださいね、ということではなく、その人の生き方を尊重し、もしこの地からまた旅立つのであれば応援しますという形で、あくまでも私たちは来てくれる人の伴走者であるということを外部の人にお伝えしたところ、比較的短い時間で反応をいただいた例があります。

指出／井波の例で、あれだけの店舗が門前にできていったというのは、急にスピード感が出てきたのでしょうか。それとも数年で何軒かずつ広がっていったのでしょうか。

島田／そうですね、やはり7年くらいはかかっているのですが、最初のうちは1、2、3と徐々に、その後5、10といった感じで一気に伸びていきました。きっかけはあるのですが、それお話しすると長くなるので明日の分科会でお話したいなと思っています。

指出／ありがとうございます。では佐藤さんいかがですか。佐藤さんの視点からお願いします。



佐藤／田園回帰の流れをどうやって地域に取り込むか。私は取り込まれた方なのですが、いま思い返すと、地域の自治振興会の会長さんが立山Craftの実行委員会の中に入ってくれたことが一番大きかったなと感じていて、いま島田さんやジソウラボが担っている役割が一番大事だなと思います。先ほどの接着剤の話とかぶりますが、やはり結びつける人を大切にしていきたいなと思います。

指出／佐藤さんやそれこそ実際にフェアに参加してくれる方々は、何を地域の面白さとか魅力として来られる方が多いのでしょうか。それもちよっと聞いてみたいですね。

佐藤／手付かずであったところが新鮮に映っているのではないかなと思います。景観を邪魔するような建物がなく、ある

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

程度集落として人が減少していく中で、いちプレイヤーになりやすい環境であると思います。

指出／それはきっと過疎地域と言われる地域にはかなり共通してある場所ですかね。

佐藤／そうですね。

指出／ありがとうございます。外から来る人を取り込むといった話のキーになるところを皆さんにお話しいただいたのですが、逆にですね、外から来る人は本当に必要なのかという問いをしたいと思います。外から来る人がなぜ必要なのか、もし皆さんの中でうすらとでも答えのようなものがあれば教えてもらえると嬉しいです。藤田さんお願いします。

藤田／実は私の次男は、富山県氷見市の地域おこし協力隊でお世話になっています。地元の方々が思う当たり前の風景や何も無い、面白くないといわれる日常も、よそから氷見に移住した次男には、とても魅力的に見えるんだそうです。都会にはないものがたくさんある、と…。

次男は最初、商店街活性化のお手伝いしていましたが、町会ごとにお祭りがあって山車があって、いろんな歴史があって、本当に「目からうろこだ」と帰省するたびに、生き生きと話しています。そんな氷見自慢を語る次男のことを、おそらく地域の方もすごく温かく見守ってくださっているのではないかなと思います。

よそ者が発見した魅力を地元の方がスッと受けとめることで、改めてまちに対する誇りと愛着を感じることでしょうし、それならもっと発信しようとなれば、よそ者が魅力発信の起爆剤にもなりますよね。そしてそれを受けとめた人たちが、さっき佐藤さんも仰っておられましたが、よそ者と一緒に、じゃあ!と言って後押ししてくれる人、一緒に走ってくれる人として集まってくれば、まちの活性化の動きが変わってくるのかなと、そんな気がしています。

指出／ありがとうございます。では金子さんはどうですか。

金子／少し具体的な例で話をさせていただきたいと思います。私が今持っているものが何かといいますが、集落の75歳以上のおばあちゃんたちの人生を振り返るとい聞書集を大学生たちが1ヶ月間かけて作った成果物になります。この冊子をつくるにあたって大学生2人が20数世帯の小さな集落に1ヶ月滞在したのですが、その学生たちが1ヶ月間かけて何をやったかという、まずそうした人生の話を聞く

ので、まずはちゃんとおばあちゃんたちと仲良くなって、話をしてくれる信頼関係を築こうというところからスタートしました。畑仕事を手伝い、偉いなと思ったのですが、いただいたかぼちゃをシフォンケーキにしてさらにおばあちゃんに返すとか、そういうことをやった上で、インタビューして冊子にまとめていきました。

そして1ヶ月が経って大学生がいなくなった後に何が起きたのかという、集落のインタビューされたおばあちゃんたちが区長さんのところに来て「自分たちはもう後先短いけれども集落のために何か役立てることがあったら言って欲しい」と言われたそうです。

それに対して区長さんはすごく感謝しておられました。ちなみに、その当時参加者した大学生の1人は卒業した後その集落に戻ってきて今定住しています。

何が言いたいかといいますと、このようにおばあちゃん達が自分の言葉で、地域のために何かやりたいという、そういう気持ちを引き出したのがその大学生2人の言動なのかなと思います。

さらに小難しく言うと、そういった地域の主体性みたいなものが、やはり外部からくる人材がいろいろ活動することで、今のおばあちゃんじゃないですが、自分たちでももう少しこういうことをやりたいとか、地域のためにこうやって動こうとか、もうちょっと頑張ってみようとか、そういったものが生まれやすくなるのかなと活動して感じます。

指出／具体的な例をありがとうございます。きっと宮口先生や小田切先生、関司先生がお考えになっている内発的発展みたいなところなのかなと思いました。では島田さん、いかがでしょうか。

島田／外からの人は本当に必要かということで、私たちは日本遺産というものの認定を受けた際に改めて井波の630年の歴史を振り返ったのですが、発見がありまして、それは何かというと、井波の変化が起きたときには必ず外部から来た人が活躍するということです。その歴史は現在にも紡がれており、近年地域で活躍していらっしゃる3世代ぐらいの方を見てもお嬢さんが非常に多いです。

そのため、やはり外部の人が変化を起こすということが必要なのではなく、外部の人の活躍がなければむしろ変化が起きないと思っています。

ですので、私たちはそういった外部の人の変化を地域が支えるという仕組みのために活動すると、やはり外部の人の力が必要といいますが、必然的にそうなると思っています。

指出／割と補完的に働き合うという感じですかね。では佐藤さんいかがですか。

佐藤／人の出入りが無い、滞っている空気を新しい人が入ることで風が入り循環していくようなイメージでいるのですが、しびれがない、何も知らないからこそ行動ができるというのがやはりよその人であって、またそのよその人が他の地域を知っている中で、この土地はとても素敵ですよ、と力強く心の底から言う言葉が、地域の方の自信の回復に繋がるのかなと思います。そうした意味でよその人は必要だと思います。

指出／ありがとうございます。今皆さんからお話いただいたように、外部の人たちが関わらない環境よりも、訪れたり居たりする方がはるかに良いことだと改めて感じました。そもそも日本ではほとんど外圧でおしゃれやファッションが決まっていますよね。自分たちの中でようやく生み出しはじめていますけれども、大体はアメリカやヨーロッパ、東ヨーロッパから来たものが文化になって、ソーシャルなアクションとかも大体が輸入しているものが多いですよね。それを肯定的に捉えれば、外から来るものに刺激を受けて、中の人たちが自分のオリジナリティのもとで地域を盛り上げていく、という構図は非常に分かりやすいのではないかなと感じました。

では次の質問にいききたいと思います。

こうやって地域の活動とか、それから社会的なところで盛り上がりを作ろうと現れる人達が単発で現れる場合は結構作りやすいと思います。イベントをやりました。1万人来ました。でも明日にはいません。みたいなことは往々にして起きやすいのですが、4名の皆さんの着実な取り組みはそういった形ではなくて、地域との関わりを段階的に踏んでいる、関係人口的な形の方々をすごく育てられているなと思います。

では外からやってくる人たち、あるいは中の人たちのモチベーション、両方含めて、外からやってくる外部の皆さんを取り組む流れをどう持続させるか。サステナブルですよ。どう持続させたらいいのかというところをぜひ教えてください。

誰か最初にしゃべりたい方いらっしゃいますか。では金子さんからいこうかな。



金子／そうですね、外部の人がどうやったら関わり続けてくれるのかということの一つで言いますと、先ほど中越地震時のボランティアの話もさせていただいたのですが、〇〇ちゃんに来てくれて嬉しいとか、〇〇さんに会いに行きたいという、そんな関係性になったらいいな、築いていきたいなという思いが根底にあります。

そうすると、何かがあるからというよりは、実際にあるのですが、自分が進路で迷ったりしたときに、その地域の人に相談に乗ってもらったりとか、あるいはリフレッシュしに地域に来たりみたいなの、そういう関係性が築けるといいなと考えています。

じゃあどうやったらその関係性が築けるのかという話ですが、地域への共感というのは、一緒に過ごす時間と一緒にかけた汗の量に比例するのかなと自分たちなりに思っています。そういった意味では、プログラムをやっている時に一緒に何かをする共通体験や成功体験、それはどんな小さなことでもよく、例えば草が芒々だった神社がみんなで苦労しながら草刈をして綺麗になったね、ということで全然よいのですが、そうしたことをこのプログラムをやっていく中で色んなところにちりばめるように心がけています。

また、内部の人たちが関わり続けたい、受け入れ続けたいと思えるかどうかもやはり同じで、外の人と一緒に何か活動する中での、やって楽しかったよねという成功体験、その積み重ねが重要だと思っており、それをすごく意識しながら、実際にプログラムを進めることを心がけています。

指出／ありがとうございます。具体的な話でもとても参考になります。では島田さんどうですか。

島田／私の場合、現在事業をされる方を呼び込むという点で外部の人を意識して話しますと、私たちは事業に持続性のある人たちを輩出していきたいと思っているので、少し矛盾しますが、この地でずっと商売をして欲しいというよりも、事

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

業として継続性を持ってやってこれればこの地を離れても
らってもいいと思っています。

まずは持続性を持ってもらえるよう地域としてのサポート、
伴走を考えているという側面があり、また、私たちの地域と
しての持続性という意味では、そうした事業に持続性のある
人の輩出が流動的に起きて走り続けることが必要だと思っ
ています。そのため、その人のプレイヤーとしての役割や、
その人にとっての持続とは何なのかということを考えなが
ら、やはり外部の人、事業者が地域に来て一番不安なのはや
はり孤独感というところなので、そこをサポートして、まずは
続けてもらうことを意識して活動しています。

指出／その孤独感を解消するために具体的なコミュニケー
ションとしてはどんなことをやっておられますか。

島田／少し昭和な話になりますが、飲み会をして日頃のスト
レスを発散してもらうなど、商売以外のプライベートな時間
を共有し、一緒に話すことを重要視しています。

指出／ワークライフバランスというよりワークライフミック
スみたいな感じですかね、きっと。では藤田さんお願いします。

藤田／私は仕事上、地域おこし協力隊の皆さんの相談やア
ドバイス事業も行っているのですが、その側面から少しお話しし
ます。

地域おこし協力隊の悩みとして、自分のミッションが何だか
分からないという人が実は結構います。タイムカードを押し
て決められた時間に出勤するも、何をしたいかわからず右
往左往。地域の人からは「何のために来たのか」とも言われ
てしまう。少なからず地域おこし協力隊員は地域に貢献した
い、まちづくりのお手伝いをしたいと志願されてきたと思
いますが、先ほどの孤独感にも繋がりますが、地域に受け入れ
られていないという思いが募ると3年間の任期を続けること
がすごく難しいという話をよく聞きました。

一方で、受け入れられている実感があると表情も活動の仕
方も変わっていきます。次男の場合、移住直後から飲み会に
誘っていただいたり、お惣菜を持ってきて下さったり、父代わ
りです、母代わりですとってくださる方が周りにいて、温か
く居心地が良いところで安心して働いていたようでした。今
は卒業して移住コーディネーターをやっているのですが、去
年には地区の祭りの総代に入れていただき、それは嬉しそ
うな声で電話してきました。「総代に入れた。だから僕は祭りの
時期は絶対どこにも行けない。千葉には帰りません。」と。
地域の皆さんとの心の信頼関係がしっかり築ければ、外から

来た人も根づいていくのかなと思います。

先ほどお話しした寄居の若者会議の卒業生の1人は、南伊奈
で地域の教育関係の活性化のお手伝いをしており、そこで
結婚して地域の皆さんに結婚式を挙げてもらいました。

何よりも地域の皆さんが興味を持ち関心を寄せ、ちょっとの
おせっかいをしていただくことが、外部人材が地域に根ざし
た持続可能な活動を行う上で大きな力になるのではないか
なと思っています。

指出／素敵なお話をありがとうございます。では佐藤さんお
願いします。

佐藤／ちょっとのおせっかい、すごくありがたいと常々思っ
ています。玄関を開けると大根や栗が置いてあったりと大事
にしてもらってありがたいなと思っています。

少し話は変わりますが、イベントを運営していて感じるのは、
運営する世代がその世代を呼ぶということです。立山Craft
は子育て世代やお子様がとても多く来場されているのが全
国のクラフトフェアの中でも特徴的なのですが、これは運営
する世代が私も含め子育て世代だからだと感じています。
高齢の方が開催するイベントには、やはり年齢層が高い方が
来場され、行政の運営されるイベントにはやはり行政の方が
多く参加されます。

これは地域運営も一緒だと思っていて、地域に若者や女性、
移住者を取り込みたい、来て欲しいという思いがあるものであ
れば、ぜひ運営側も若者や女性や移住者を話し合いの場に
呼んで欲しいなと思っています。それが活性化に繋がる大事
な要素だと思います。

指出／ありがとうございます。実はこのあと聞きたいと思っ
ていたことにリンクしたコメントをいただけてうれしい限りで
す。

僕は2008年にNPO法人ETICの方にお声がけいただいて、
地域若者チャレンジ大賞という表彰の審査員とメンターを
ずっと務めさせてもらっていたのですが、その当時まちづく
りとか地域づくりをやっている、格好いい若い皆さんが20代
の半ばから30代前半でした。その皆さんが、まさに今お話が
あったように、佐藤さんのようにライフステージが変化して
若い子育て世代の皆さんになられていて、30代40代の方に
シフトしていきました。

今一番まちづくりや地域づくりで活躍しているのは30代40
代で、島田さんが言われたように、30代40代は両方の視点
からまちを作っていくことができる力や若いセンスがあっ
て、一番良い世代だと思います。

こうした30代や40代が各地に現れた結果、ローカルイノ

バージョンと言われるものがかなり広がったと思います。おしゃれなカフェがこれだけできる時代を2008年に想定できていませんでした。

一方、ここに経年の課題もあります。30代40代の時は全然良いと思うのですが、例えば1998年にNPO法が成立してからかなり時間が経っており、当時は若者だった70代ぐらいの方がNPOの現役のリーダーだということも珍しくなく、そうしたNPOから、世代がそのまま持ち上がり、最近新しい人たちが入ってこなくて、実際に呼び込んでなかなか来てくれないという相談をよく受けます。

ここで4名の方にぜひお聞きしたいと思います。

世代をずらしていく、その地域に新しい、若い世代が入っていくためにどのような活動をするか。また、自分たちが中心の世代からさらにオフセットして、世代を下げるためにどうしたらいいでしょうか。少し難しい質問ですが、ぜひ果敢に教えてください。

金子さんからお願いします。

金子／新潟でも同じような状況がたくさんありますが、上の世代の方が頑張っていてこられた活動をそのまま引き継ぐ、代替わりすること自体あまり考えない方が良い気がしています。若い人たちがやりたいのであれば若い人たちがやりたい団体を作ることが必要なのかなと思います。

また、新潟のいろんな人の顔を具体的に思い浮かべるとするのは、年配の方、ベテランの方の中に若者に理解を示してくれる方がいらっやると非常にスムーズに移行できます。それこそ先ほど表彰を受けた山古志村さんはまさにそうですが、若い人は若い人の団体で、それをベテランの人たちがしっかりサポートしてくれているという形が理想かなと思います。

一方、そうではないところも少なからずあり、そういう団体ではその世代の間に入って防波堤になる役割の人も必要なのかなと思います。

指出／ありがとうございます。大変参考になりました。藤田さんいかがですか。

藤田／まちづくりの文脈は一本ではないので、その地域ごとにいろんな年代によるいろんな形の関わり方があると思います。

3年前から総務省の地域力創造アドバイザーを拝命しており、茨城県の過疎地域である利根町に入らせていただいています。高齢化率が42.5%となり、子育て世代が少なく、小中学校はそれぞれ一校という地域です。

個人商店も減少していく中で、町が考えたのは、起業塾など

人材育成事業を実施するとともに空き店舗を活用したチャレンジショップを用意すること。希望者はここで修行し、契約期間終了後は利根町で出店を目指すことを条件に公募したところ、現在2人の方が挑戦しています。

現在の出店者は元看護師の子育てママ。地域に乳幼児やママがゆっくりできる場所がないので、乳幼児とママさんがリラックスできるカフェを創りたい!と開業されました。

当初は「利根町でそんなカフェを開いても、お客さんは来ないよ」といわれていましたが、蓋を開けてみると20km、30km車を走らせてお客さんが来られます。ハイハイしかできない赤ちゃんのために板の間でゆっくりできるスペースを用意し、PRスペースを設置し、利根町の見どころや特産品など、帰りに立ち寄っていただけるお店の紹介などもしています。

また、先ほど佐藤さんがおっしゃられたように、同じ年代の人から「このお店でヨガ教室をやらせて」など、この場を借りて〇〇をしたい!という声も集まっているようです。

今の時代はSNS等を活用した情報発信ができるので、足元に若者がいなくても大丈夫。

地域活性化の担い手として手を上げる人がいましたら、ぜひ活躍できる場をご提供いただければと思います。

また、年齢を重ね活動がしんどくなられた方には、若い世代が生き生きと活躍できるよう、サポートをしていただければいいなと思います。

指出／チャレンジショップいいですね。ありがとうございます。では佐藤さんお願いします。

佐藤／若い世代が提案する新しい視点、アイデアを信頼して任せてあげる。その後押しをしてあげる。そして若い人たちに小さな成功体験をつかさせてあげて欲しいなと思います。

指出／立山Craftはまさにその象徴のような感じで広がっているようにお見受けします。では島田さんいかがですか。

島田／これは僕たちも本当に大きなテーマだと思っていつも議論しています。明確な答えは正直ないのですが、私たちが気を付けているのは、弱音を吐かない、ネガティブなことを言わないということで、そういった雰囲気をつくり出して、まちの人たちにそれを感じてもらえるように心がけています。

私たちが今やっている団体もいち早く次の世代へバトンタッチして、私たちの団体から次の世代の団体に渡していくという、そういう手離れを早くしていく流れを作りたいなと思っていますが、自分に置き換えたときに、じゃあ10代からまちの

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

ことを考えられたかという、やっぱり厳しいです。

30、40代になって初めて自分がどうあるべきかみたいなことを考えるので、そこへ来るまでは楽しい環境があるよということを示しつつ、然るべきときにまちと向き合ってくれる流れを作っていけたらいいなと思っています。

実際どんな現象が今起きているかという、呼び込んだ5名は大体同じようなコミュニティの中で活動しているのですが、実は募集した時に私たちは面接して選考させてもらっていて、年齢制限も設けていました。

年齢制限を設けたのは年齢が高いと文化の源泉になりにくいので若い人に来てもらいたいという理由だったのですが、そうすると、若い人たちのコミュニティができ始め、自分たちで商店街を作ってそこで祭りみたいなことをやろうという話になっています。

先ほどの話ではないですが、自分たちの子供に代替わりするという発想ではなく、若い人たちがやりたい団体を作る、そんな形でやっていくと、おのずと若い人たちのコミュニティが生まれていくのかなと思います。

地域の子供達の人数はかなり少ないので、彼らだけにその地域を背負わせるというのはやっぱり重いですし、僕たちもそんなことを言われたこともないので、そういったことは自分でまちの中で感じ取っていつてもらって、使命を持ってやってもらう流れを体現していくことが今僕たちのできるのかなと思ひ活動しています。

指出／ありがとうございます。議論が止まらない雰囲気になりつつありますが、そろそろまとめに入らないといけない時間になりました。

宮口先生が過疎地域という場所は美しい自然の中の営みであり、都市にない価値を持つと仰ってくださっていたのが、僕の中でとても心強く感じました。

過疎地域の魅力といえぱいっぱいあると思うのですが、今回のテーマはウェルビーイングです。ウェルビーイングというのは、身体的にも社会的にも精神的にも良い状態にあることのように訳されがちなのですが、一言で言うと幸せである時間がいかに長く続くかみたいなことだと思います。

僕は意識してご機嫌な状態と訳していますが、過疎地域がご機嫌な状態にいるためにはどうなっていけばよいのか。その辺りを一言ずつ、4名の皆さんにいただけたらと思います。では藤田さんから行きましょうか。お願いします。



藤田／ご機嫌な状態、すごくいい言葉だと思います。ウェルビーイングという、はてなと思ってしまう人もいますが、私が私自身でいられる場所、私がご機嫌でいられる場所＝過疎地域だったら頑張らなくていいのではと感じます。

一方で、この村ではこれを守ってもらわなきゃいけないとか、この条件をのんでくれないと困るなど、移住者にくぎを刺し、すったもんだがあったというニュースを聞いたことがあります。ご当地の皆さんもウェルビーイング、すなわち私が私であるご機嫌な状態で迎えていただくことが必要ですね。

そして、みんなが今ある資源を大切に、地域の暮らしを楽しむ。楽しんでウキウキワクワクしている様子を多くの人に発信していく。それがすごく大事なのかなと。

ウェルビーイング、とても素敵だと思います。ぜひそうなったらいいですね。

指出／ありがとうございます。では金子さんいかがですか。

金子／やはり地域のそこに暮らす人たちが自分の地域に、人それぞれで良いと思うのですが、誇りを持てる地域であることがご機嫌な状態なのかなと思います。そして、外から来た人にもこの地域ってこうなんだよと前向きに伝えられることが重要だと思います。

もちろん楽しいだけでなく辛い厳しい局面もいっぱいあります。例えば、新潟県内のある市町村でアンケートとったのですが、高校生でまちを出たい、卒業後に出たいという人が95%ぐらいいて、そのうち3分の2がもう戻ってきたくないと回答しました。その数字が多いのか、割合が高いのかという問題もありますが、実はその親の世代にとったアンケートを見ると、病院がない、店がない、不便しかないといったネガティブな意見ばかりしか出てきません。そういう親の元で子供が育てば子どもの結果も当然そうなります。

もちろん厳しい局面があることも事実ではあるので、うちの

まちにはこういう良いところもあるよね、と少し発想を切り替えることが必要だと思います。それができると地域に誇りが持てたり、こういう大変なところもあるけど、こういう楽しいこともあるよ、と思えたりするのかなと思います。そして、そうしたことをちゃんとと言える地域がご機嫌な地域なのかなと感じます。

指出／ありがとうございます。視点を変える大事さをご指摘いただきました。では島田さんお願いします。

島田／地域がご機嫌な状態ということで、小さな幸せになりますが、私たちの地域は7000人ちょっとのまちということもあり、挨拶を交わせるまちであることが非常に気持ち良いなと思っています。子供たちやお年寄りとおはようございます」「こんにちは」とか「ご機嫌どうですか」と言い合える仲がある場所というのは非常に居心地が良いといえますか、幸せだなと感じる部分があります。

明日分科会で見ていただくのですが、グリーンスローモビリティ（※時速20km未満で公道を走ることができる電動車を活用した小さな移動サービス）が実証実験でまちなかを走っています。乗っている人が子供たちと挨拶を交わせるぐらいゆっくりしたスピードなのですが、そこで子供たちが登校時歩いていたりすると、「こんにちは」と言ってくれて、これに対して挨拶ができていいね、とおじいちゃんおばあちゃん達が言われているとお聞きして、自分自身もそうですが、そういったコミュニティがあるというところが、私は地域としては居心地がいい場所かなと思っています。

また、個人的には、自分のやりたいことに挑戦できる、自己実現できるという地域が幸せなのかなとも思っています。

指出／ありがとうございます。では佐藤さんお願いします。

佐藤／島田さんのご意見と少し近いのですが、人との繋がりが一番ウェルビーイングを感じるうえで大事なかなと思っています。

移住の視点でも、やっぱりおいしい食べ物があっても、美しい景色があっても、それよりも人との出会いが何よりも心が動きます。

皆さん富山県のウェルビーイングの指標がお花になっているのをご存知でしょうか。

地域に根を張って、家族や友達の繋がりの中で芽が出て葉っぱが茂って、その上で自分らしさや生きがいの花が咲くという、ご機嫌な自分が実現されるというのが富山県の指標にもなっています。やっぱり地域との繋がりが、それが大事かなと思います。

指出／富山県の素敵な例えをありがとうございます。佐藤さんがお話されたようにその土地があるから花が咲くということを見ると、過疎地域にはその豊かな土地、土があるのだろうなと思いました。

長きにわたって4人の皆さんとトークセッションを行ってきまして、この後質問の時間も取りたいと思いますが、1回まとめに入りたいと思います。

過疎地域という言葉で括ってしまうと、いろいろな視点が現れると思いますが、一言で言うと今の都会の若者たちは過疎地域にゾクコンです。めちゃめちゃ好きです。

もう大好きでたまらない、どこに行ったら良いかわからない、指出さん地名を教えてよ、という感じです。ですからどんどん過疎地域に引っ張って行ってください。

なぜそこに惹かれるのか、それは富山の中山間地域をはじめ、自分が知らない世界がそれだけあって、自分が伸び伸びとできるところがあるからなんですよ。

それを気づかせてくれるもう一つのステップ、ラストワンマイルみたいなものを僕たちはもっと作らないといけなかなと思いました。

今日のテーマの中では「外部人材」がキーワードになりましたが、地域が幸せになっていくためには地域の皆さんのモチベーションが上がることも大事ですし、そのモチベーションが上がるためには鏡効果として外からやってくる人たちが必要だということについて、たくさん議論がなされたのではないかなと思います。

いずれにしても、内発的な発展という言葉が示すように、自分たちのまちのことを、地域のことを誇りに思って、面白がって、もうすぐいい場所だよ、ということをもみんなが声を出して伝え合うことで理解が広がっていくのかなと思います。

ウェルビーイングとハッピーというのは両方とも幸せを指す言葉ですが、微妙に違ってきます。ハッピーを短期的な幸せと言われている。一方ウェルビーイングは中長期的な幸せと言われている。

さっき佐藤さんが仰ってくださったような、一晩のうちに花を咲かすわけではなく、種から芽が出てそれが成長して花を咲かせるということは、まさに中長期的な幸せですよ。過疎地域のウェルビーイングの幸せというのは、きっとこの中長期の幸せを外から来る人と中の人がお互いに糸のように絡み合いながらできていくといいのかなと思いました。

ここで一度トークセッションの方は終わりにしたいと思います。10分間確保しましたので、聞きたいこと、質問したいこと、感想などあったらぜひ、マイクを持っていきますので挙手していただけますでしょうか。

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

参加者／藤田さんにお伺いしたいのですが、一連のお話の中で「地域の人には大したことがない風景であっても、よそから見た場合には大変違って見える。地元の方には無関心ということを克服して、関心を持つようになってもらいたい。」と仰っておられたように、最終的に大切なのは、地元の人がその地域に対する誇りと愛着を持つということであり、そこが過疎問題を考え、過疎地域が豊かな少数社会となるための一番根本でもあると思っております。

そのために藤田さんや他の方も悪戦苦闘されてきていると思うのですが、その中で、地域の方々に誇りや愛着を醸成する、あるいは再確認してもらうために、こういうやり方、あるいは仕組みというものが一番効果的じゃないかなとお感じになっておられれば、教えていただければと思います。

またもう1点、地元のそうした取り組みに対し、特に地元の市町村と一緒にやってこういうことをしてくれればいいのに、あるいは後方支援してくれれば良いのに、と感ずることがあるとすればそれはどういう点か、という二点をお伺いしたいと思っております。

藤田／実は自分のまちを好きじゃないという人より、心の中では好き、あるいは自慢に思っている人の方が多いように思います。でも皆さん、なぜか奥ゆかしくて言えないのです。

それなら堂々とまち自慢ができるよう、まずは「私のお気に入り」を発信できるツールを、ということではじめたのがまち歩きMAPプロジェクトでした。

もちろん、表現方法はマップに限らず、かわら版のような小さな情報紙でもいいでしょう。まず思いを「手に取れる形」にすることが大切です。

行政や支援機関の皆さんにお願いしたいのは、それを実行するために必要な印刷費の支援や、会議室など活動の場を提供していただけると助かります。あとは市民に任せていただいで…。

また最初の質問に戻りますが、「このまちには何もなし」とおっしゃる人がいるならば、その方にガイド役をお願いし、即席のまち歩きツアーに出かけてみてはいかがでしょうか。おそらくガイドさんは張り切って、「今は〇〇だけど、昔は〇〇だった」とか「あそこの店主はむちゃくちゃ面白い!」「この和菓子店は創業100年以上、すごいでしょ」など、地元ならではのとおきの話をしてくれるはず。そして、同行した人たちも知らず知らずのうちに、改めてまちの魅力を再発見することができるでしょう。

MAPづくりもまち歩きツアーも地味ではありますが、まちに対する誇りと愛着を醸成するにはうってつけの活動です。協力してくれる人が3人いれば、すぐにできると思いますよ。そこから少しずつ共感の輪が広がり、やがて「このまち大好

き」な人たちが集い、まちの元気づくりにつながっていくと思います。

指出／お答えありがとうございました。ちょうど時間になりましたので、ここでパネルディスカッションは終わりにしたいと思います。藤田さん金子さん島田さん佐藤さんありがとうございました。

